

『プライベート・サファリ♥』

著: 森本あき

ill: 明神 翼

そうやって見ていると、よく視界に入ってくるのがジョーの姿。

とにかく、いろんなところを回っている。キリンとたわむれたり、ゾウの耳を撫でていたり、ダチョウにずっとついてこられて、笑いながら走っていたり。昼間はぐた一つとしてるか、寝てるだけのライオンやトラの檻にも行って、何かを話しかけている。黒熊とチーターは起きているから、檻の前に座って、長い時間を過ごす。

なんで、ジョーを、わざわざ双眼鏡で追ってるんだろう。

そんな自分を不思議に思ったりもするけれど。自分が、いま、ルリとサマーのそばを離れられないから、ジョーになったような気持ちで、追体験しているのかもしれない。

だいたい午前中いっぱい使って、ジープであちこちを回り、午後は散歩がてら、歩いていく。肉食獣のところには、飼育係がいないときは近寄らない。

そういうところも、すごくかしこいと思う。

狩りをするのは、彼らの本能だ。たとえば、人間が不機嫌なときに、ずっとしかめっ面をして、近寄るな、のサインを出したりする。そうすると、普通の人には、そばにいかない。機嫌が悪いときもあるよね、と放しておく。

たまに空気の読めない人がいて、しかめっ面の人に果(か)敢(かん)にアタックする。なあなあ、機嫌直せよ、なんて、よけいなことを言って、にらまれるだけならまだしも、虫のいどころが悪ければ、胸倉なんかつかまれるかもしれない。

その、胸倉をつかむ、に当たるのが、肉食獣の爪だったり、牙だったりするのだ。

人間に飼われた動物は、たしかになつくし、野生のものよりも危険性は少ない。だけど、ゼロじゃない。外に向けて発表はしないけれど、動物園やサファリパークで、痛ましい事故はいくつか起こっている。それはすべて、過信をしたからだ。

こんなに自分に慣れてて、仲がいいんだから、大丈夫。危害を加えたりしない。

そんなことはない。機嫌が悪いライオンに近づいて、爪で体をえぐられることだって、十分に起こりうる。

先輩に言われた、すごく印象に残っている言葉がある。

動物を恐れるやつも、かといって、まったく恐れないうやつも、飼育係には向いていない。

肉食獣の爪や牙は危険なものだ。

その自覚をしっかりと持っていれば、ある程度、危険は回避できる。完全に、じゃないことが、悲しい。

でも、もし、夏瑞がトラやライオンに爪を立てられたり、牙で噛まれたりしても、それはそれでしょうがないと思っている。

その覚悟は、飼育係になったときから、ずっとある。

ジョーは、俺が飼ったんだから、俺になついているはず！ とか楽天的なことを考えそうなのに、そうじゃなかった。きちんと動物の性質をわかって、絶妙な距離を置いている。

一緒に回りたいな。

ふいに、そんなことを思った。

ジョーと一緒に、このサファリを回ったら、すごく楽しそうだな。いま、一番の望みは、ラクダに乗せてもらいたい。ジョーが乗っているところを目撃して、ああ、ぼくもやりたい！ と、思わず、口に出してしまったほどだ。

ルリとサマーが、びくっ、と体を震わせて、夏瑞の大声に反応していた。ごめんね、ごめんね、と謝ったものの、目が開いたとはいえ、視界がぼんやりしている状態の二匹には、かなり怖かっただろう。

それは、すごく反省してる。

とにかく、ジョーはこのサファリを管理して、そのうえ、動物との触れあいに時間を割(さ)いている。たくさんの飼育係と獣医を抱えているものの、管理するのは大変なはずだ。

だから、ジョーには頼まない。

「一番かわいいところは、ぼくが見届けるの。それに、ジョーが授乳できるとは思えない」

夏瑞は、いたずらっぽく笑って言う。

何度も、俺にも授乳をさせろ、と言われていた。そのたびに、断った。目が開くまでは不安だったし、ジョーのことをそこまで信頼できなかったから、というのもある。

でも、この二週間、ずっと、この檻からジョーを見てきた。ジョーの動物への愛情を感じることができて、ようやく、ジョーにも授乳させてあげようか、と思えるようになった。

ジョーは、授乳という言葉に食いつく。

「あのな、おまえはいつもそうやって却下するけど、俺はルリとサマーにミルクやりたくてしょうがねえんだよ。ずっと我慢してんだ。夏瑞がそばにいて、指導してくれりゃいいじゃねえか。だれだって初めてってのはあるわけだし、ものは試した、やらせてみる」

「さっき、やったばかりだよ」

ジョーの必死さがおかしい。そして、すごくかわいく思える。

最近、ジョーのことを好意的にとらえることが多くなってきた。

それがどうしてなのか、よくわからない。でも、悪い傾向じゃないことだけは理解できる。

だって、飼い主とうまく連携できたほうがいいに決まってるから。

「ちえっ」

ジョーが悔しそうな表情を浮かべる。

「よし、つぎのは俺がやる。それでいいな」

「うーん」

夏瑞は少し迷うふりをした。でも、もう心は決まっている。

自分がミルクを与えてるから、この子たちは元気に大きくなっていく。そのことを、すごく嬉しく幸せに思う。

それを、ジョーにも味わってほしい。せつかく、ホワイトタイガーの赤ちゃんがいるんだから、経験しなきゃもったいない。

「わかった。いいよ」

もったいぶって夏瑞がうなずくと、ジョーが、やったー！ と両手を上に伸ばした。そのまま、夏瑞を抱きしめる。

「サンキュ！」

夏瑞は、ただ呆然と、抱(ほう)擁(よう)を受け入れるしかない。

なんで、抱きしめられてるの？

そうは思うけど。

これは、たぶん、ハグってやつだ。自分が過剰反応してるだけ。

「何時に来ればいい？」

「三時間後」

一応、三時間おきに授乳している。人間の赤ちゃんと似たような感じだ。母親がいれば、いつでも子供が飲めるようにずっとお乳のところに子供を置いていて、目が開かなくても、好きなときに子供は飲める。でも、母親がここにはいないから、時間を決めてやるしかない。

もちろん、足りなそうなときはあげるし、いらぬ、というしぐさをされれば、無理にはあげない。あくまでも、目安として決めているだけだ。

いまはそれで、うまくいっている。

「わかった！ よーし、いまから、練習するか！」

ジョーは、ぱっ、と夏瑞の体を離れた。

あー、よかった。ハグが終わった。

夏瑞がほっとしたのもつかの間。

ジョーが夏瑞の肩に手を置いて、右頬、左頬とキスをしてきた。

ええええええええ！ これ、男同士でやるもの!? 映画で見たことはあるけど、実際に自分がされるなんて、思ってもみなかった！

そんなことは口に出せず、夏瑞は、ただ、固まっている。

「また、あとで」

ジョーは言いおくと、最後に、夏瑞の唇に軽いキスをした。そのまま、すぐに離して、ルリとサマーを、もう一度撫でると、ひらひら、と手を振って、檻を出る。

残された夏瑞は、動けなくて。

ただ、小さくなるジョーの後ろ姿を見つめつづけた。

「なんの意味もないよね」

夏瑞は自分に言い聞かせる。でも、それだけじゃ、もやもやした気分が治まらなくて、すやすや寝ているルリとサマーに小さな声で話しかけた。

「ねえ、どう思う？」

もちろん、答えなんて返ってこない。口にすることで、もしかしたら、すっきりするかも、とありえない希望を抱いているだけだ。

「習慣なのかなあ」

海外に行ったこともなければ、いろんな国の習慣なんてものも知らない。ましてや、ここはどこともわからない場所。

ありがとう、の気持ちをキスで表すのは当然で、みんながそうしているのなら、騒いだほうがおかしく思われるだろう。

でもね、でもね！

夏瑞は、ふう、と息を吐いた。

「初めてだったんだよね…」

飼育係になりたい。

夏瑞はそのために、たくさん勉強をしてきた。ちょっとぐらい、いいな、と思う相手がいなかったわけじゃないけど、だれかのために割く時間も余裕もなくて。

飼育係として一人前になったら、彼女をつくろう。

そう思っていた。

でも、実際、いつ一人前になれるのかわからない。だからといって、休みの日は一日寝てるか、連休なら日本中の動物園に飛んでいくような生活をしている、いまの自分に、恋をする暇(ひま)も資格もない。

そういえば、先輩たちから、おい、彼女ぐらいいないのか、なんてこと、聞かれたこともなかった。普段の会話も、飲み会でも、話すのは動物のことばかり。

だから、とても心地よかった。二十三歳という年齢は、飼育係としたら若い。だけど、だれともつきあったことがない、と打ち明けたら、ちょっと驚かれるぐらいの年ではあるだろう。

だれか紹介してやろうか？

親切に、そう言ってくれる人も出てきたかもしれない。

そういううつつしさを感ぜずに過ごせる環境を、いまさらながら感謝した。あそこには、本当に動物が好きな人ばかりが集まっている。

だけど、少しぐらい、恋愛関係の相談をしておけばよかった。

ふいにキスされたんですけど、これってどういう意味だと思います？

その答えを、だれかに教えてほしい。

なんの意味もない軽いものなら、忘れなきゃいけない。

でも、もし、意味があつたら？

あれが、普通のキスだったら？

自分は、どうすればいい？

夏瑞は、じっと二匹を見つめた。おなかをふくらんで、また引っ込んで。その繰り返しを眺めていると心が落ちつく。

ああ、生きてるんだなあ。

そのことが嬉しくて、ほっとして、そして、幸せすら感じる。

トラの赤ちゃんが生まれたときも、そうだった。飽きずに呼吸をするところを見つめていた。仕事での悩みなんて、すぐに吹っ飛んだ。

だけど、いまは、もやもやが消えない。

あのキスは、いったい何？

そのことばかりが、頭を占めている。

答えが知りたいければ、ジョーに聞けばいい。

それが正しいことぐらい、夏瑞だってわかってる。

でも、でも、でも。

さっきのキスに意味はあつたの？

そんなこと、真面目な顔して問いかかけられない。習慣だとしたら、ジョーはだれとでもキスしているだろうし、夏瑞にしたことすら忘れていくかもしれない。

ぼくだって、キスなんて慣れてるよ。気にしてないからね。

そうやって見(み)栄(え)を張りたいたいと思うのは、悔しいからだろうか。

キスをされてからずっと、そのことばかりを考えている。

そんな自分が、女(め)々(め)しくていやだ。

そして、一番の問題が。

「…いやじゃなかったんだよね」

キスされたときに逃げられなかったのは、とっさのことだから、しょうがないとしても、そのあとで、殴ってやりたい、とか、ふざけんな！とか、そういう怒りに似た感情が湧かなかった。

キスされたことを、普通に受け入れてしまっていた。

だから、こんなに困っている。

いやだったらよかったのに。

もう二度としないで！と抗議できるぐらい、嫌悪感でいっぱいになればよかったのに。

「つぎに会ったとき、どんな顔したらいいんだろう」

夏瑞は、二匹が眠っている柵にもたれて、寝顔を見つめた。

かわいい、とは思う。

愛しい、とも感じる。

でも、心の中にあるおかしい気持ちは、どこにも行ってくれなくて。

夏瑞は、大きくため息をついた。

もう少しでジョーが授乳にやってくる。

そのことがいやなのか、それとも、待ち遠しいのか、それすらもわからなくて。

ただ、ため息をこぼすしかできなかった。

本文 p112～123 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>